

遠いパラグアイで伝えた東日本大震災

¡Hola a todos! ¿Cómo están?

みなさん、こんにちは！

私はJICA海外協力隊としてパラグアイに派遣され、野菜栽培隊員として活動している会田安那です。

今回は、東日本大震災を経験した私が、パラグアイの日系移住地で講演する機会をいただいたことについて紹介します。

この講演は、私自身が福島県いわき市で東日本大震災を経験したことをきっかけに実現しました。



【写真1：ラ・パスでの講演(低学年)の様子】



【写真2：ラ・パスでの講演(高学年・一般)の様子】

東日本大震災が発生した当時、私は小学3年生でした。今から15年前の出来事ですが、あの日のことは今でも鮮明に覚えています。

震災当時、日本には世界中から多くの支援が寄せられました。その中には、決して十分とは言えない環境の中で暮らしながらも、日本を支援してくれた国々からの温かい支援もありました。

その事実を知った時、「自分たちも大変な状況にある人々が、なぜ日本を助けてくれたのだろう」と衝撃を受けました。

この経験をきっかけに、世界には貧困や環境問題など、さまざまな課題を抱える地域の現状を知り、「いつかこの恩を、今度は自分が誰かのために届けたい」という思いを抱くようになりました。そして、国際協力や農業、地球環境について学べる大学へ進学し、農業と環境という密接に関わる分野に興味を持ちました。

さらに、JICA海外協力隊として現地で活動することで、知識だけでは得られない経験や視点を身につけ、世界の課題解決に貢献できる人材になりたいと考え、応募を決意しました。

今回の講演は、パラグアイの日系移住地の一つである「ラ・パス（La Paz＝平和）」日本語学校において、子どもたちを対象に実施しました。同地で活動していた同期隊員の協力もあり、このような貴重な機会をいただくことができました。

パラグアイでも「Tsunami（津波）」という言葉を知っている人は多くいます。しかし、東日本大震災については「日本で大きな地震があった」という程度の認識であり、遠い国で起きた出来事として捉えられていることもあります。

講演では、震災当時の状況や私自身の体験、世界各国から寄せられた支援、日本人同士が助け合う姿、そして震災が私の人生や進路に与えた影響について話しました。
当時の映像を見て涙を流す子どももあり、怖さを感じる場面もあったと思います。しかし、その一方で、「命の大切さ」や「もし自分だったらどのように行動するか」について、一人ひとりが真剣に考えている姿がとても印象的でした。



【写真3：子どもたちが講演を聞いている様子】

講演後のアンケートでは、多くの児童・生徒が「日本人同士が助け合う姿」が最も印象に残ったと回答していました。

パラグアイで育った子どもたちの中にも、日本への思いや誇りが受け継がれていることを感じ、私自身も胸が熱くなりました。また、最後まで集中して話を聞き、積極的に質問してくれた子どもたちの姿から、伝えたい思いがしっかり届いたことを実感しました。



【写真4：講演後アンケート用紙を記入している様子】

さらに、この講演をきっかけとして、もう一つの日系移住地であるシウダーデルエステの日本語学校でも講演を行う機会をいただきました。こちらは非日系の生徒も多く、幅広い年齢層の生徒が在籍している学校であったため、スペイン語通訳を交えながら実施しました。

講演後には、「日本はなぜ地震が多いのか」、「放射線の心配がある中どのような生活を送っていたのか」など多くの質問が寄せられました。

震災についてもっと知りたいと積極的に質問する生徒たちの姿から、国や文化が異なっても、互いの経験に耳を傾け、理解しようとする気持ちが人と人をつなぐのだと感じました。



【写真5：シウダーデルエステでの講演の様子】

実はパラグアイは、東日本大震災の際に「豆腐100万丁プロジェクト」という支援プロジェクトを実施してくれた国でもあります。パラグアイ日系・日本人連合会を中心に、全国から支援が集まり、パラグアイの主要農産物である大豆から作られた豆腐が被災地へ届けられました。

この大豆栽培は、日本から移住した先人たちによって広まり、現在ではパラグアイを支える重要な農産業の一つとなっています。地球の裏側にあるパラグアイから、日本へ届けられた支援。その背景には、日本から移住した人々が築いてきた歴史と、両国の深いつながりがありました。



【写真6：東日本大震災の被災地へ届けられたパラグアイ産大豆の豆腐】（写真提供：在パラグアイ日本国大使館）

震災当時、私は世界中から受けた支援に励まされ、その恩返しをしたいという思いから国際協力の道を志しました。そして15年後、今度は自分が海外で震災の経験を伝える立場となり、日本とパラグアイをつなぐ役割を担うことができました。

震災の記憶は、時間とともに少しずつ薄れていきます。

しかし、その経験から得た教訓や、人と人との助け合いの大切さは、国や世代を超えて伝え続けていく価値があるものだと感じています。

今回の講演を通して、改めて「伝えること」の持つ力を実感しました。

これからも福島県出身者として、日本と世界をつなぐ架け橋となれるよう、一つ一つの活動を大切にしていきたいと思います。

<講演後に寄せられた声>

- ・ラ・パスには津波や地震があったら怖かったです。あと、家族が亡くなってほしくないです。
(小学2年生)
- ・自分たちも大変なのに、助け合っている日本人の姿に感動しました。(小学6年生)
- ・地震や津波の恐ろしさを知りました。話を聞いてとれも胸が痛くなりました。(中学1年生)
- ・地震で亡くなった人は全員見つからないんだと思いました。このまちで実際に地震みたいな災害が起こったら、自分のことで精一杯で人を気になげられないかもしれません。やっぱり日本も日本人もすごいと思いました。(中学2年生)
- ・震災の経験を語り継いでいくことの重要性を再確認しました。(一般)

¡Muchas gracias, hasta pronto! 🙌